

# 川端康成の文学

新潟県湯沢町道の駅みつまたから見える雪山

## ◆第1回 2月13日(金) 午後2時~4時

講義:川端康成の言葉と人生  
~「孤児」から「ノーベル賞作家」へ~

## ◆第2回 2月20日(金) 午後2時~4時

講義:『雪国』の表現  
~「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった~

## ◆第3回 2月27日(金) 午後2時~4時

講義:「掌の小説」の世界 ~川端康成の「詩」~



■講師 藤田 佑氏

・相模女子大学日本語  
日本文学科専任講師

## 全体内容

日本人初のノーベル賞作家として知られる川端康成(1899-1972)は、『伊豆の踊子』『雪国』など、日本の風土を美しく描いた作品の数々で知られています。

しかし川端の生涯や作品を紐解くと、「いかにも日本的な小説家」というイメージには取まりきらない魅力が見つかります。

川端の言葉と人生に触れながら、彼とその文学の豊かさ掘り下げていきましょう。

## ■募集要領

●12月10日(水)より定員になるまで (12月28日~1月3日まで休館)

午前9時より電話または窓口で受付開始

●場所 大野台公民館 大会議室 ●受講料 無料 ●募集人数 50名(先着順)

●申込・問合せ 042-755-6000

●主催 公民館文化部



木もれびの森 大野台公民館

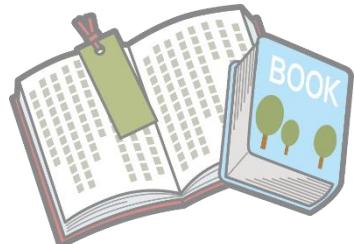
## 講座概要

### 第1回 川端康成の言葉と人生——「孤児」から「ノーベル賞作家」へ

「ノーベル賞作家」「文豪」「日本的」といったイメージの強い川端康成ですが、孤児として出生し、大正期のデビュー前後はいかにも「モダン」な、切れ味鋭い理論家でした。日本美術を蒐集し、小鳥を飼い、弔辞や新人発掘の名人と謳われた川端の横顔を、様々な作家との交流を通じて紹介します。

### 第2回 『雪国』の表現——「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」という『雪国』冒頭の一文は誰もが知っている、日本文学を象徴する一節です。では、この表現はなぜ有名で、何が凄いのでしょうか？『雪国』翻訳の問題にも触れながら、日本語の小説表現の面白さ・奥深さにせまります。



### 第3回 「掌の小説」の世界——川端康成の「詩」

川端は終生にわたって、数ページにも満たない小ぶりの小説＝「掌の小説」を書き継ぎました。百篇以上にわたる「掌の小説」は、確かに小説なのですが、詩のような美しさを具えています。「掌の小説」を実際に会場で読みながら、川端の文学の美しさを見つけていきましょう。

## 講師プロフィール

ふじた ゆう  
**藤田 佑氏**(相模女子大学日本語日本文学科専任講師)



1986年生まれ。東京町田市出身。東京大学文学部卒業、同大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学。東京大学助教を経て、現職。博士(文学)

専門は日本の近現代文学で、三島由紀夫を中心に、戦後文学の研究を行う。三島由紀夫の作品・作家研究、戦後文学史の構想、「小説とは何か？」という問題へのアプローチを、主な研究課題としている。著書に『小説の戦後：三島由紀夫論』(鼎書房、2022年7月)、共著に『三島由紀夫小百科』(水声社、2021年11月)等がある。